

宮沢賢治とヘンリー・ソローの比較研究：その思想 と実践について

松原，留美

<https://doi.org/10.15017/2348697>

出版情報：九州大学，2019，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：



氏名	松原 留美		
論文名	宮沢賢治とヘンリー・ソローの比較研究 —その思想と実践について		
論文調査委員	主査	九州大学准教授	西野 常夫
	副査	九州大学教授	高橋 勤
	副査	九州大学教授	波瀾 剛
	副査	九州大学名誉教授	太田 一昭
	副査	福岡女子大学教授	小谷 耕二

論文審査の結果の要旨

本論文は、宮沢賢治とアメリカの作家ヘンリー・ソローの著作にあらわれた思想を主に比較検討し、さらに両作家の思想や信念に基づく実践的行動についても補足の形で比較し考察を加えた論文である。両作家は、ともに日常的に自然と積極的に関わり、著作の中で自然や自然と人間との関係を重要な素材として取り上げた作家である。本論文で両作家を比較するのは、両作家のそうした関心の共通性が前提になっている。

本論文の論述の手順としては、まず両作家のそれぞれの考え方を分析することによって、そこに共通点と相違点を明らかにし、次に、そうした共通点と相違点の生じた理由を両作家が生きた異なる精神風土や文学環境といった要素と関連づけながら、考察していく、という方法を取っている。

各章の概要は次のようである。序章では、本論文に関係のある先行研究を概観し、また、それらと本論文の問題設定の違いについて述べている。両作家のそれぞれについての先行研究は膨大であるが、両作家を直接に比較した研究はごくわずかであるため、本論文によって、この領域における学問的寄与が見込まれることが想定できる。

第一章では、両作家が、いずれも、ラルフ・エマソンの著作から影響を受けたことに着目し、影響の様相について分析している。賢治については、エマソンのどの著作に接したかという実証的考察を含めている。ソローについては、エマソンから直接的に大きな影響を受けたが、やがて、部分的に独自の考え方を展開し始めたという点にも注目し、両者の自然観の相違にも言及している。その上で、人間の精神は本来、「大霊」(Over-Soul) という超越的な宇宙的原理につながっていると、いったエマソンの汎神論的な考え方を両作家がどのように受け止め、どのように著作に反映させたかということについて考察している。

第二章では、人間の中に存在している野性や動物的本能といった要素について両作家の考え方の共通点と相違点を考察している。考察の結果、例えば賢治は丘浅次郎の『進化論講和』で説かれる「人間は獣類の一種である」という考え方やアニミズム的な考え方に影響を受けて、動植物と人間は対等のものであると常に意識していたと論じている。一方、ソローの場合は、クッタードン山に広がる原生自然を、人間を寄せつけない自然の例として描写するが、そこでは、人間と自然の間に境界を想定する認識論がうかがえる、と結論づけている。

第三章では、自然の法則性についての両作家の考え方を確認し、両作家が自然から学んだことをどのように日々の実践につなげていこうとしたかということについて考察している。その結果、両

作家とも、自然から人間の倫理の手本となるものを学び取ろうとする自己修養的な態度を持ち合わせていたことを確認している。その上で、賢治の場合は、法華経の教義における法則性を思考の中心に置き、個々人の問題よりも、社会の調和に強い関心を寄せ、近隣の農民の生活の向上を支えるために「羅須地人協会」を立ち上げているという、その実践性に注目している。ソローの場合は、自然に近づくためのウォールデンにおける非文明的な独居生活の実験や、奴隷制反対運動を始めるよう、著作を通じてアメリカ人に訴えるなどといった実践が見られるが、そうした実際の行動を始めるための条件となる個人の内部の精神的覚醒をうながすことに重きを置いていたことを確認している。

結論として、両作家はいずれも自然に親しみ、自然から学べる事柄は人間の倫理的な面にも示唆を与えうると確信し、そのことを文学を通して表明した作家であると強調している。著作から読み取れる両作家の自然観や自然と人間の関わりについての考え方は、部分的には相違点があるが、両作家は、動物間の進化の度合の違いや人間社会の階級を越えた自由を求める態度において共通しており、とくに、人間は自然と調和して生きるべきであると考えていた点が重要な共通点であると強調している。

本論文の意義としては、上記の概要中に示したいくつかの知見のほかに、次のことが挙げられる。人間とその環境としての自然の共存の可能性を問う文学というテーマを取り上げた場合、宮沢賢治とヘンリー・ソローは、それぞれ日本とアメリカの当該文学を代表する作家の一人であると考えられるため、その比較研究は当該領域の文学研究の進展にとって意義深だけでなく、広く自然環境の問題を考える上でも大きな示唆を与えると想定できるのであるが、従来、両作家の比較研究は十分にはなされてこなかった。本論文における両作家の体系的な比較研究によってその不備は相当部分補完されたため、本論文は今後の本領域での研究で参照されるべき基本的文献の一つになると考えられる。こうした理由で、本論文は学術的寄与をなすものであると認め、博士（比較社会文化）の学位に値するものであると判断した。